聖杯の女怪盗

カズト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖杯の女怪盗

【Nコード】
N7454B

【作者名】
カズト

【あらすじ】
ちょっと斜に構えてて、不器用で、好きな人に告白できないヘタレ、黒井湊。彼が月下を仰ぐ時、聖杯の女怪盗は颯爽と現れる。不幸なヘタレが織り成すおそらくはラブコメディ。美麗で華麗な怪盗のショータイム、とくとご覧あれ。――見てね♪

ナイトメア・ブラック　前編

「時計台の上だ、照らせ！！」
　この街のシンボルといわれる時計台。
　数多の大観衆と、幾多の警察の方々が見つめる中。数台の投光器によってその一角がピンポイントで照射される。
　古びた時計台。その天辺に浮かび上がるのは純白の怪盗。
　彼女の姿を認めてわっと歓声が上がる。
「今宵の獲物。涙の雫は確かに頂いた」
　そう不敵に笑う彼女の掌には『涙の雫』が握られていた。
「くぉらぁ。降りてこんかい！！」
　けたたましく怒鳴り散らすのは橘警部。髪に少し白髪が交じり始め、いかつい顔でこちらを睨み付けている。カリスは不敵に笑うと、
「警部、降りてこいと言われて『はいそうですか』と返すヤツはいませんから」
「やかましいわ！」
「そんなに怒鳴ると喉が痛みますよ。じゃあね♪」
　最後に彼女は警部を小ばかにすると、ポンという軽快な音と共に煙幕を放つ。
　もうもうと時計台を包み込む煙。観衆も固唾を呑んで見守った。
　そして、煙が消えるとその場から一斉に飛び出したのは。

「鳩？」

誰からともなく呟き、それは次第に歓声、賞賛へと変わっていく。
時計台には彼女の姿は無く。まるで彼女の化身のように真っ白な鳩が大空へ羽ばたいた。
呆然とする橘警部。その頭上にひらひらと舞い降りたのは。

”お体、お大事に”　ｂｙ怪盗カリス

橘はプルプルと小刻みに震えて、

「ふざけやがって。あのクソアマーーーー！！」

ナイトメア・ブラック　前編

黒い学生服の少年。黒井湊は手元の新聞紙を見てにんまりと笑っていた。
色彩豊かに彩られた一面。それが湊の上機嫌な理由だ。
掲載された写真には金髪の髪と紫紺の瞳、純白の衣をまとう女性。タイトルは、
「怪盗カリス。昨夜も『涙の雫』を鮮やかに奪取。警部の悔しがるさまが目に浮かぶようだぜぇ。ケケケ」
湊は鼻を伸ばして上機嫌で鼻歌を歌う。
（いやあ、さすが俺。ふふん♪）

世間一般に”怪盗カリス”とは宝石専門の泥棒のことを意味する。
俊敏な身のこなしと、医師・外交官・弁護士と様々な変装で姿を現す神出鬼没さ。加えて強固な警備網も、厳重なセキュリティもやすやすと破ってしまう鮮やかな手口。
そのドラマチックなまでに洗練された盗み、卓越したカリスマ性。彼女のファンなど数知れず。ちょっとしたアイドルだ。
そんな彼女を人は畏敬と畏怖をこめて”聖杯の女怪盗”と呼ぶ。
「たく、やっぱ同等のライバルがいねーと。張り合いがねーなぁ」
「ライバル？」
「そうそう、この俺、かいと――――……うぎゃあっ！」
独り言に問いかけられ、思わず口を滑らせかけた。湊は素っ頓狂な奇声を上げてザザザとあとじさる。

「よう」

突然の乱入者はさして悪びれることなく、片手を上げて挨拶する。
「独り言をブツブツ言ってたからさ。少しからかってやろうと思って」
「テメェ。こっちは心臓が止まるかと」
「それは残念」
冗談めかして肩をすくめる彼女、橘香里は笑う。
十代後半の若々しく真っ白な肌と、すっきりととがったあご、ちょっときついけど綺麗な切れ長の瞳。ひきしまった鼻のライン。プロポーションは本人は女性的魅力はないというけどそんなことはな

い。シェイプアップされた肢体は適度に筋肉質で湊は好きだった。
そう、好きなのだ。
まあ、当の本人は自分と友達感覚で付き合ってるし。湊も今の関係から今一歩踏み出せないでいる。
毎日、登校途中で会うこともしばしば。そのたびに友達以上のステップアップは不可能だなと痛感する。何故なら。
「今日もカリスの記事か。毎日毎日好きだね」
「へいへい。どうせ、俺はカリスが好きだよ」
(俺よ。何故にそう可愛くない反応を返す！)
自分の中ではそういうつもりはないんだが。自分はもしや天邪鬼なのだろうか。
学校に向かう道中、そんなことを本気で悩む。かなり深刻に。
「どうした。元気ないけど」
(テメェが原因だよ)
そういうかわりに「ケッ」と拗ねたクソガキのようにプイと顔をそむけた。ち、致命的だ。
「今日は機嫌悪いね」
ここはフォローしないと真剣に嫌われてしまう。冷静に冷静に。
「これは生まれつきだ」

完璧だ。高校生の日常会話をかなり高い水準でクリアしている。顔をそむけたままなのがちと痛いが。

「あんた、熱でもあるんじゃないの？」

そんなに本気で心配されると複雑な気分だ。つーか「これは生まれつきだ」をどんな顔で言ってしまったのか。

しかし、それよりも。

「か、顔近いぞ」
「気にするなって。私とあんたの仲でしょ」
（ど、どんな仲だ!？　↑男子高校生の脳内をご想像ください）

俺の顔色を見ようと香里が大接近。頬が真っ赤に紅潮するのが自分でも分かる。

（顔が接近中、顔が接近中、顔が接近中。危険、危険。意外にぽってりとした唇だな、オイ）

「ん、熱は大丈夫だな」
「ハ！　ば、バカ離せ」

額に乗せた右手を反射的に払いのける。

「さては、エロい想像でもしてたな」
「ハハ、ンナワケネーダロ」

（大正解！）

カリスの時のポーカーフェイスなど宇宙の果てに置き忘れた。
「あ、もうそろそろ行かないと。こんなところで油を売ってるとお互い遅刻するし」
「アア、本当ダ。急ガナイト」
壊れたブリキ人形みたいに奇妙な口調を操る湊。
その後はなんだか一杯一杯の登校風景だった。

†

木漏れ日が差し込む教室。
窓の外から樹齢百年何年の巨木の枝が風にざわめき、登校中の生徒が真下をちらつく。なるほど、たまには窓の外に目を向けるのもいいものだ。
——ああ、やっぱり現実逃避はよくない。
湊は嫌々ながら教室に視線を戻す。すると何人かと目が合い、すぐに目をそらされた。
「いったい何なんだよ」
異様な雰囲気だ。動物園のパンダにでもなった気分。そんなの泥棒家業だけで十分だ。
(なんかしたか、俺)
少なくとも日常生活においては品性方向なほうだ。裏で泥棒やってちゃ世話ないが。

「多分な。大勢の男子の嫉妬や。彼女、美系でレベル高いし」
「オイ、いきなり背後を取んな」
「おはようさん。今日も天気がええね」

無理やり話題をさわやかに。彼が見た目、茶髪で眼光鋭い不良男だが中身は馬鹿、丹下准だ。
……なんちゅう紹介だろう。

「今日は天気もええしな。絶好の質問日和や。さて、おじちゃんに話してみ。何で彼女と登校したん？」
「あのなぁ。それは道でたまたま会っただけだ。他にはなんもねぇ」
「ホントにそうかぁ」

准はニヤニヤしながら湊の耳元にささやく。どうでもいいが容姿が不良っぽいだけに妙な威圧感がある。

「だってお前」
「あ？」
「橘が好きなんやろ」
「ブッ！！」

吹いた。むっちゃ吹いた。

「うわ、汚っ」

准にも散ったらしい。見るも無残だが、それは遥かにどうでもいい。

「お前、エスパーかよ」
「お前が分かりやすいだけ。実はな。俺はずっとお前らやきもきし

ながら見とった。それがやっと告白を」
「告白なんかしてねーよ。あと大声出すな」
「告白してない？　嘘やろ」
「……文句あっか」
「ヘタレ」

グサリ

「あ、すまん。ついつい口が滑った」
「気ニスンナ」
「うわ、片言モードに入った。じゃあ、話題を変えてと」
「わざとらしい話題転換すんな」
「まあまあ。これでも見て」

差し出されたのはありふれた、例えば駅のプラットホーム等で販売されている、そんな大衆新聞だった。
裏面にめぼしい物はないので湊は表にひっくり返してみる。現れたのはでかでかと一面を飾る女怪盗の姿。

「えーと？」

それは登校時に湊が読んだあの一面に他ならない。
湊は嫌な予感に襲われる。たいていこの展開になると。
「彼女、昨日も獲物を盗ったみたいでな。俺も行きたかったけどバイトで無理やった。ファン倶楽部会員として一生の不覚やと思う」

(やっぱこれだよ)

「お前な。まだあのくっだらねぇファン倶楽部にいるのかよ」

「当たり前や。そうだ、失恋を癒すならお前も入らん？」
「誰が入るか。それに失恋してない！」
始まる前に終わってどうする。すべては玉砕精神だ。玉砕？
「相変わらずつれないなぁ。正体を明かさないミステリアスな魅力。何より美人。ファンになって損はないぞ？」
（つーか本人だし）
「まあ、カリスは今日も予告状を出したみたいやから、お前もファンになるって。ええと予告された宝石は」
「町田美術館で展示されてるブラックオパールだろ。たしか名前は」
「何やったっけ？」
「ナイトメア・ブラックじゃなかった？」
（こ、この声は）
「橘？　珍しいな、アンタが俺らに話しかけるなんて」
「たまにはそんな日もあるよ。あ、これ。教室に入るときハンカチ落としてた」
「お、おう。サンキューな」
ぎこちなくハンカチを受け取る湊。香里は「じゃあ」と簡潔に去る。
みんなの注目を一心に集めた気が。特に野郎の視線。
「う〜ん。いつ見てもいい女や。中身ずぼらやけど」
「そ、そうかぁ？」

「なら、お前は彼女のどこが好きなん？　容姿だけ？　おじちゃんに話してみ」
「実はさ。あれで意外と気立てがいい。って、誰が話すかよ！」
「お前はホントに面白いヤツやな」
　准は面白そうにきゃらきゃら笑う。他のヤツなら右フックのひとつでも入れるところだが何故か准の笑顔は憎めなかった。
「じゃあ、それはまた今度。あと、ひとつだけ忠告や」
「忠告？」
「彼女、実は性別を超えておモテになる。特に女は怖いで、彼女をお姉さまと慕う連中がいるとか聞いたし」
「――ありうる」
　バレンタインで学年一位の獲得数を得たあいつだ。生徒のみならず、新任の先生からも頂戴したらしい。
(余談だが、彼女からチョコGETを企んでいた湊は何者かにボロ雑巾にされた)
　そういえば今日は朝から妙な気配を感じる。いや、これはむしろ殺気のような。
「よ！　羨ましいね、この色男」
「――ありえねぇ」
　湊は平穏な下校風景、もう戻らないが、を思いそっと涙を流した。

ナイトメア・ブラック　前編（後書き）

＜後編・予告＞
怪盗カリスこと黒井湊は予告どおり町田美術館へと向かった。
しかし、彼を待ち構えるのは無数の警備に堅牢なショーケース。
そして、カリス専任の橘警部。果たして湊はナイトメア・ブラックを盗めるのか!?
キーワードは【偽者】です。見てね♪

ナイトメア・ブラック　後編

ぽかぽか陽気のうららかな天気。
とある教室の一角、授業中にもかかわらず彼はとある作業に熱中していた。
素材は巷の百円ショップから、知り合いのアングラショップまで軒並み揃えてある。
(この精巧な細工が難しいな。まあ、暗闇ならごまかせるか。うん、いい感じ)
我ながら惚れ惚れする完成度だ。次いで集めた資料を参考にスプレーで慎重に塗装していく。それも完了。
(よし、完成だ)
作業が終わると彼の手元には見事な出来栄えの黒馬(ナイトメア)が存在していた。

ナイトメア・ブラック　後編

時刻は午後、六時を少し過ぎた頃。
平日にもかかわらず、町田美術館という古びた建物は大変な賑わいをみせていた。シンプルな造りの入り口が開放され、大勢の人々が波を作ってそこに吸い込まれていく。
そんな光景を見て、湊は感嘆するというか呆れるというか、ちょ

っぴり複雑な気分を味わっていた。

（カリス目的なら素直に喜ぶべきだろうけど。みんな、男ファンだろうからなぁ）

そういう気持ちで湊は口を開く。

「こんなに人が来るなんてな。予想外だった」

「そうか？　彼女のファンは普通に多いよ。ファンサイト見てたら他県から来る人もおるみたいやし」

准が、何を当たり前な、とまるで自分のことみたいに胸を張って答える。

放課後に准に誘われた湊は二人で町田美術館に来ていたのだが。どうせ盗みに行くつもりだ。そう踏んで了承した湊は早くも後悔していた。

「これで彼女の勇姿をバッチリ撮る。燃えてきた、燃えてきたで」

准はデジカメ片手に準備万端。それでカリスを撮るのだろうか。ゾゾゾと鳥肌が、生理的嫌悪が走る。　何か全神経がすさまじい警告を発していた。

（獲物を盗る前に、俺が野郎に撮られる！）

撮られる前に盗る。そんなことはおくびにも出さず湊は口を開いた。

「准、そいつがお前の相棒か」

「ああ、これか。親父から借りたんや。これでシャッターチャンスは逃さんで」
「なるほど。あれ？　何か美術館の入り口が騒がしいぞ」
「カリスが現れたんか！」

准が目を離した一瞬。その隙に湊はデジカメに手を伸ばした。

「……館長やん。オイ」
「館長？　ああ、あのタヌキね」

入り口でカメラに囲まれてアナウンサーからインタビューを受けている中年の男。恰幅がよくタヌキの愛称で親しまれる渡辺館長だ。

「あの人も意外にちゃっかりしてるな。美術館を無料で開放してあそこを宣伝してるみたいや」
「俺は客寄せパンダか。あのタヌキ」
「は？」
「あ、いや。やっぱカリスが悪いよな。盗みを予告したんだから」

（ふう、危ねぇ危ねぇ）

「ほら、俺たちも美術館の中を見学しようぜ」
「痛い痛い。あんまし急かすな」

ごまかすように准を引っ張ると、湊は見学という名の下見に向かった

†

美術館に一部屋だけ見学できない部屋があった。ナイトメア・ブ

ラックの展示室だ。
その場は複数の機動隊員と刑事たちに埋め尽くされ、薄闇が不気味さを演出する。
そして、宝石を飾るショーウインドウ。周囲には念入りに機動隊たちが配置されている。頭数は揃えたようだ。

(あれが本物のナイトメア・ブラック)

湊は持ち前の視力を活かしてナイトメア・ブラックを凝視した。ダークグレイなボディカラーを持つブラックオパールのイヤリング。二対のイヤリングからは確かにオーラのような魅力が感じられる。
情報によれば黒い馬をあしらった見事な意匠が施されていて、それがナイトメアの由来だとか。

(悪夢(ナイトメア)か。誰に対する悪夢だろうな。ケケケ)

「君。そこで何をしている」
「うわ!」

不覚にも後ろを警備の人に取られた。しかも不気味な忍び笑いを見られた。怪しい。実に怪しい。自分も第三者なら怪しいと感じるだろう。
ここは自慢の演技力で乗り切るしかない。冷静になれ、冷静に。

「いや、実は男子トイレを探してまして。アハハ」
「なに? 男子トイレだと」
無理だ。自分でも実に無理のある誤魔化しだと思った。その証拠に相手は湊を睨んで、

「トイレならあっちだ。早く行きたまえ」
（いや、それでいいのか、オイ）
　自分の立場そっちのけで突っ込みたい湊。さすがはあの警部の部下。そう、突っ込みたいのは山々だがここはグッと我慢して。
「ご親切にどうも。助かりました」
「礼はいいから早く行け。怪盗カリスとみなすぞ」
「冗談キツイなぁ」
（マジで）
　湊は苦笑いを残してあわててその場から立ち去った。

　赤い絨毯が続く廊下を歩き、元の見学者コースへと戻る。美術館の廊下には人並みが続き、なかなかの盛況ぶりだ。その人並みで手を振る准を見つける。
「よう、准」
「ご苦労さん。どうやった」
「警備はなかなか。昨日も宝石を盗まれたから警察の威信にかけても。ってところだと思う」
「じゃあ、シャッターチャンスは美術館を出ようとする瞬間ってわけやな」
「そういうこと。残念だったな」

（ま、俺にとってはハッピーだけど）
湊にとっては断然そっちの方が嬉しい。
准は肩を落として「無理なら外で待とうや。腹も減ったし」と提案してきた。
「悪い。俺、ちょっとトイレ。先に外で待ってろ」
「早よ済ませや」
「うっせえよ。じゃな」
（さてと、配電室はこの廊下を右に曲がった奥。男子トイレはその手前か）
ここからが腕の見せ所だ。ひとつのミスも許されない。
湊は上着をごそごそと探り——精巧な黒馬の細工を施したイヤリングを取り出した。

†

予告一分前。
警備する各員にも緊張が走る。ぴりぴりと張り詰めた空気だ。
そんな時でもひとりだけマイペースな者がいた。いかめしい顔と、よれよれのコートがトレードマークの刑事。
怪盗カリス専任の刑事、橘警部だ。
「ふう、こんな時こそ一服したいもんだな」
「のん気なこと言わないでくださいよ」
彼はタバコのジェスチャーをして、薄く笑う。部下は呆れ顔で配

置についていった。
（まったく。あの一服が俺の集中力を研ぎ澄ますんだよ）
彼はコートのポケットに手を突っ込み、落ち着かない様子で革靴のつま先をコツコツ鳴らす。
そんな虫の居所が悪い彼に誰かが話しかけてくる。この美術館の館長だ。
「どれ、警部さん。様子はどうですか」
「これはこれは、館長。これといった変化はありませんよ」
彼の言うとおりナイトメア・ブラックが展示されたショーケースに異変は見受けられない。
それより橘は館長に尋ねておきたいことがあった。
「館長。ここは他の部屋とくらべてずいぶん暗いですねぇ。老眼の鳥目にはキツイですよ」
「オパールは乾燥すると亀裂が走ってしまう。だから強い光を避けているんだよ」
「なるほど」
「でも、これではちと暗すぎるのぉ」
「……ちょっと失礼」
橘は懐からピンク色の携帯を取り出し、どこかに電話をかける。
「おう、配電室、異常はあるか？　なに、館長があかりの調整を指示した？」
すぐに電話を切る。

「館長、説明をお願いします。あれ？」
右を向いても、左を向いても、前を向いても機動隊員と刑事のみ。館長の姿が見えない。
「刑事さん、何を慌てているのだね」
後ろ、背後から誰かが話しかけてきた。振り返るとそこには怪訝そうな館長。
「ああ、そっちにいたんですか。改めてお聞きしますが、何で配電室に勝手な指示を」
「配電室。いきなり何かね？」
「――もしかして」
橘は安物の腕時計をはじかれたように凝視する。短針は七を、長針が五十九分を示していた。
「館長は！　渡辺館長はどこだ！」
「はて？　わしならここに」
館長の言葉を遮るように、全照明がいっせいに消えていく。
(ヤツめ。館長に変装してやがったな)
機動隊員も突然の出来事にざわめいている。この混乱に乗じて盗る気だ。橘は急いで各員に指示を出していく。
「刑事さん。そんなに慌てずとも盗られやせんて。何しろこの警備

じゃ」
「分かりませんよ。相手はあの盗賊ですからな！」
「そうそう、そのとおり♪」

「「なっ！？」」

ポンという軽快な音と、まるでマジックショーの演出のような煙幕がたちこめる。
そして、煙の中で煌々と灯る火。ライターの青白い炎と気づくのにさほど時間はかからなかった。

「今日は我がショーへようこそ。まずはこちらをご覧ください」
とうとう現れた彼女、怪盗カリスは純白の袖から無防備に右掌をかかげた。

「では……ワン、トゥー、スリー！」

黒馬の細工を施したイヤリング。ショーケースに飾られたはずのナイトメア・ブラックが怪盗カリスの掌に瞬時に現れた。

「や、ヤツを取り押さえろ。宝石を取り戻せ！」
大の男たちが一斉にカリスへと突っ込む。それでも彼女は余裕の笑みを崩さない。

「バン♪」

彼女の手元でいきなり炎が爆発した。彼女を取り押さえようとした機動隊員たちは思わずたたらを踏む。

「驚かせてゴメンね」
「ちくしょう！」
煙幕は尚も吹き上がり、カリスの姿を捉えられない。
外部からの進入を防ぐために部屋を閉め切っていたが、それが裏目に出た。橘は部下に窓を開けるように指示する。部屋が換気され、ようやく煙幕は消えた。カリスは……いない。
「け、警部さん。本当にナイトメア・ブラックは盗まれて」
「今から確かめます！」
橘はショーウインドウに小走りで駆ける。
「な、何じゃこりゃ」
橘の目に映ったのは真っ白に塗りつぶされたショーウインドウ。そこに黒文字ででかでかと"ハートマーク"が描かれている。十中八九カリスの仕業だ。しかし、これでは宝石の無事を確かめられない。
「ああ、やはり盗まれて」
館長は力なく頭をたれる。なまじ体格がいいだけに深い悲壮感が伝わってきた。
橘は仕方なく部下に指示してショーウインドウを開けさせる。予想を裏切り、中央の台座に鎮座しているのは。
「おお、館長。ナイトメア・ブラックは無事ですぞ」

橘が大事そうに持つのは確かにブラックオパールを埋め込んだイヤリング。

「ほ、本物か。どれ、貸してみなさい。私が鑑定しよう」

「ええ。ぜひ」

偽者で捜査をかく乱するのはカリスの常套手段だ。さして疑問を抱かず館長に手渡す。

館長は橘にはよく分からない専門の器具で鑑定を始めた。それを見ていた橘に部下が声をかける。

「警部。ちょっと」

「ん？　ああ」

「どうかしたのかね？」

「いいえ、気にせず鑑定を続けてください」

館長をその場に残して部下の下に駆けつける。

「警部。これを見てください」

部下が指差したのは部屋の目立たない死角。そこに誰かが倒れていた。

「いったい誰が。って、なにーーーーー！！」

「これ――渡辺館長ですよね。どう見ても」

彼の言うとおり、目を回して倒れているのは館長だ。この顔と体格は彼以外にありえない。

「どういうことだ。あ、いないぞ！」

振り返ると館長が蜃気楼のように忽然と消え失せていた。
となると、さっきの館長は偽者？　そういえば最初の館長は自分を警部さんと呼び、後から来た館長は刑事さんと呼んでいた。
「あ、あのクソアマーーーー！！」
橘はある意味で恒例行事となった。ある不躾な彼の部下曰く『負け犬の遠吠え』を上げた。

「今頃、警部はキャンキャン吠えてんだろうな。ケケケ」
湊は国道の脇にある並木道を笑みを浮かべて歩く。
手元には戦利品のナイトメア・ブラック。まるで吸い込まれそうな黒い輝き。怪しげな魅力を持つ。
湊にとっては無用の長物になってしまったけれど。もっと違う形で出会えば素直に魅了されていただろう。
「結局、これも目当ての宝石じゃなかったな。さっさとタヌキに返さないと。このままじゃ、あのタヌキにとっての悪夢だぜ」
それではさすがに可愛そうになってくる。あの美術館は好きなのだ。館長もふくめて。
湊は黙ってナイトメア・ブラックを包んだハンカチを服に入れる。
「渡辺館長、今夜の心境はいかがですか」
「年甲斐もなく緊張していますよ。ホッホッホ」

「ん？」

聞き覚えのあるだみ声だ。うわさをすれば何とやら。湊は歩みを止める。

とある電気店のテレビがいっせいに流れる同じインタビュー。インタビューを受けるのは例の館長。

（ああ、あの時の）

准と美術館に来た時、館長がインタビュアーに囲まれていたからそれだろう。

「今夜の意気込みはどうですか。渡辺館長」
「いやー、意気込みなどと。私に出来る事はありませんし。それに」
「それに？」
「あのコソドロにはむしろ感謝してますよ。彼女もせいぜい客寄せパンダぐらいには活躍してほしいものですな。アッハッハ」
「これが町田美術館で撮影された予告前の映像です。直後、怪盗カリスに宝石を盗まれるわけですが。館長もショックで気を失ったとの情報が」

「……ハハハ」

END

蛇足♪

「誰か忘れてる気がすっけど。ま、いっか」

町田美術館、本館。

「ぎいやああああああ！！」

美術館の一角でひとりの少年が大音量の悲鳴で叫んでいた。

「どうしてデジカメのメモリースティックが忽然と消え失せとるんや」

美術館前で湊を待っていた准は絶好のチャンスをつかんでいた。そう、目の前に怪盗カリスが現れたのだ。

美術館の窓を破って現れたカリスは、もしかすれば准の気のせいかもしれないが、カメラを向ける准にウインクしたと思う。准は本気で感動した。なのに。貴重なウインクシーンだったのに。

「そういえば撮った時、いつもと感覚が違った。嬉しくて気にせんかったけど。嘘やろ、ありえんて、こんなの悪夢や！！」

END？

ナイトメア・ブラック　後編（後書き）

＜あとがき＞

この作品、ただ短編が書きたくて仕上げたモンッス（長くて、前後編に分割したけど）ガキの頃から怪盗モノ（怪盗ルパン、怪盗キッド、果ては神風怪盗ジャンヌまで）が大好きだったんで。それをラブコメ調で書きました。まあ、未熟なので”所々あれ？　これどこかで見たぞ”みたいなシーンが多々あるでしょう。すんません、精進します。

この作品を読んだ貴方の貴重な感想、批評。我がチキンハートは戦々恐々しながら待ってます。

フレイム・アイ　前編

盗みに後悔を覚えたこと、そんなのいつもだ。このくりかえしに意味なんてあるのか、そう悩んだ時期もある。もう泥棒なんてやめて、素直に自分の運命として受け入れよう。そう揺らいだ日もあった。

けど、それでも、自分は泥棒をやめない。

普通の高校生にもどるまで、怪盗カリスをこの世から消し去るまで。

フレイム・アイ　前編

いつもの通学路。いつもの並木道。いつもの高架橋の上を通るオレンジ色の電車。いつもの登校風景だ。

ただし、普段と決定的にちがう箇所がある、となりの女だ。

この橘香里という女が朝も早くから家に押しかけて学校へ行こうと強引に誘ってきたのだ。

「でさ、昨日ね」

楽しそうに、好きなテレビのこと、自分の身の回りのこと、酔っ払い親父のこと、こいつは本当に可笑しそうに話す。

それにひきかえ、今の自分はぶすっとした仏頂面だ。天邪鬼は表情にも出る。いや、表情に出ないか。

自然とため息が漏れ出す。またひとつ幸せが逃げていく。あぁ。

「それでさ、あの映画って」

「ああ」
「お母さんが」
「ああ」
「ちゃんと聞いてる？」
「ああ」
「って、危ないよ、前！」
「ああ——ぐべっ！？」

ボーっとしてるといきなり自転車がタックルしてきた。世間様でいう接触事故。体に鈍い痛みが走る。

「ちょっと、湊。あんた大丈夫？」
「だ、大丈夫じゃない」

後ろから香里が駆け寄ってくる。なんとか助け起こされた。

「す、すまない。大丈夫か」

湊たちの高校とはちがう高校生。人を轢いたくせにあまり申し訳なさそうじゃない。というより、相手の様子がおかしい。顔も青ざめている。

「ほ、本当にすまなかった」
「あ、おい、コラ！」

腕時計を見るやいなや、高校生はすばやくその場を去ってしまった。

†

「という、出来事があったんだ」
「おまえ、いつでもトラブるな。これは一種の才能やぞ。くく」
そのことを准に話したらいきなり大笑いした。ひぃひぃ言ってやがる。この笑いのツボは自分には永遠に理解できない。
「准、頭になんか乗せろ。オレがカードで投擲してやる」
手元から瞬時に五枚のトランプを扇状に出した。ちなみにカリス用の細工札、実践向け使用。
瞬時に怯えた羊になる准。

「後生やから勘弁」
「いちおう冗談だ、いちおうな」
笑って五枚のカードを視覚的に消す。

「そ、そういえば。今度、理科の先生が新しくなるそうやってな。楽しみやね、うん。うわさでは美人らしいぞ、マジで」
「そんなデマ信じるなよ。どうせ、前と同じでハゲオヤジに決まってら」
「夢がないな、夢は見るもんや」
「はあ、夢ねぇ」
(カリスがいるかぎり。オレの夢は当分叶いそうにねえな)

†

満天の星空の下。淡い月光の支配する空間に怪盗は現れる。
今宵の獲物はかの狩谷コンチェルン総帥、狩谷信三所有のパイロープガーネット、フレイムアイ。
さてと、上空を旋回する野暮な鉄の鳥に、機動隊員が複数。狩谷邸の周囲には番犬としてドーベルマン。
先端の尖った囲いの返しへカリスはつま先立ちで直立していた。
衣の袖をがさごそと探り、純白の衣には明らかに入りきらない物体が出現する。
拡声器。
『みなさん、怪盗カリスが来ましたよ〜〜〜〜〜〜〜！！』
夜の静寂を打ち破る盛大な声が狩谷邸全域を揺らした。
『わたしは逃げも隠れも……するかもしれませんが。とりあえずここにいまっす！』
”特殊な連絡”を受けて数多の観客が押し寄せてくる。まさに四面楚歌。
（ふふん、レッツショータイム）
囲いの上から軽快なステップで人波に躍り出る。大群の群れへ無防備に突っ込んでいった。
「う、うわ！」「くそ、俺たちの中に」「探せ、カリスを逃がすな

！」
群れに迷い込んだ盗賊を探そうと躍起になる彼ら。
でも、見つかるはずがない。何故なら自分はすでに”あるカムフラージュ”をしていたから。
そう、彼らと同じ機動隊員の格好だ。
(ブラウン神父じゃないけど、木の葉を隠すなら森の中ってね)
でも、予想以上に揉みくちゃにされた。死にそうになりながらもなんとか人垣から脱出する。
獲物のいない狩りに熱中する野獣たち。そんな飢えた獣たちにカリスは餌を放つ。
「怪盗カリスが屋敷の奥に逃げました」
「なに！！」「警部、奥に逃げたようです」「追え、逃がすな」
わっとある程度の人数が屋敷の奥へと消えていった。
(行ってらっしゃ～い♪)
「さてと」
機動隊員の格好で堂々と広大な屋敷内に進入する。
(にしても)
女になって気づいたが、こういう男物の服は胸がこすれて痛い。

それにちょっと装備が重たいので疲れる。まあ、女特有の体型を隠してくれるって利点もあるけど。

「この姿とも早々におさらばしたいなっと」

階段を二段飛ばしで駆け上がり、ついに獲物が待つ書斎の目前まで来た。

(変装はしてないけど、今日はＯＫかね)

事前に声色を変えて、紫紺の瞳はカラーコンタクトを入れ、フェイスガードで顔の造詣もごまかせる。最初から準備万端。

豪奢な扉を開ける。真っ先に目が合ったのは、やはり因縁の橘警部。

銀色のライターをカチャカチャと弄った動作のままこちらを凝視している。

「報告します。警部、怪盗カリスが現れました」

「あん？　それぐらい、あのバカが出した大声で知ってる！　今、外を警備してた連中に追わせてるとこだ」

「それがですね。屋敷の中にこんなものが」

「これは、ヤツの衣装じゃねーか！」

レプリカの衣装、当然だが証拠は一切残していない、を手に取り凝視する警部。

「奇妙な呪文が刻まれていて。おそらく間違いないかと」

「どこで見つけた」

「二階と三階を結ぶ廊下です」

「くそ！　あいつらはなにやってんだ！」

愚痴をわめき散らしながら警部は無線を取り出す。
『二階及び三階の各員、おまえらなにやってんだ！　カリスの痕跡が出てきたってどういうことだ！』
部下に叱責し始める橘警部。
（おーし、今のうちに）
警部が気をとられているすきに部屋の状況を綿密に把握する。
警備の連中たちと自分との距離は離れている。窓までの距離は走って十歩ぐらい。
悠々と警備連中の間をくぐり、風景を切り取るようにデザインされた大きな窓を開放させる。
「おい、奴らは痕跡なんて最初からないって言ってる、あれ？」
「こっちこっち」
「あん？　って、ああああああ！！」
「こんばんわ、警部」
すでに機動隊員という衣は脱ぎ捨て、窓枠に手をかけた状態で不敵に笑む。
「今日は月が綺麗ですね。いっしょにお月見でもしませんか？」
まるで世間話でもするような口調でカリスは微笑んだ。
「この、ミス・神出鬼没め。毎度毎度、むかつく登場しやがって。

――だが、諦めろ。その下には無数の狩人がひしめいてる。おまえに逃げ場はねえぞ」
「狩人？　するとわたしは袋のネズミ、とか？」
「わかってるじゃねえか」
　窓から下を見ると、無数の飢えた狼たちが獲物が降りてくるのを今か今かと待ち構えていた。
「ふん、今日こそ年貢の納め時だな、カリス。ネズミは大人しく食われろ」
「いやいや、警部。わたしを食らうにはあと二十年遅いですって」
「なにぃ！」
「それにほら、奥さんも娘もいることですしね。それじゃ、チャオ♪」
「逃がすか！」
（いざ、エスケープ、スイッチオンだぜ♪）
　手元のスイッチを押すと舞台上の演出を思わせる煙幕が窓枠から射出され、自分の姿を急速に覆い隠していく。
「くそ！」
　警部は急いで駆け寄ったが、カリスはすでに飛び降りた後、機動隊員たちの元へと白き衣が舞い落りる。
「急げ！　また、あいつらに化けるつもりだ！」
　警部と数人の部下は慌てて部屋を飛び出していった。それを見届けて、もぞもぞとレースのカーテンがうごめく。

煙はなおも噴射し続け、部屋に残った宝石を守る者たちを次々に沈めていった。
効き目のよわい催眠ガスだ。ただし、吸い続けると眠ってしまう。

（いつもの煙幕だと油断したな、ケケケ）

カーテンから出ると、ようやく窮屈なガスマスクを取り外すことができた。

「ぷはぁ、生き返った。う〜ん、空気が美味しい」

それにしても、予想以上にうまくいったものだ。さっきのレプリカとはべつのレプリカを木片に着せて落としただけなのに。

「ま、それはさておき。今夜のメインデッシュ、メインデッシュと」

すやすやと安眠している彼らを起こさないよう慎重に近づく。
獲物が封じ込められたショーウインドウの中に眠る女神像。その左眼に目当てのフレイム・アイは鎮座していた。
手元のバールでショーウインドウを破ろうと……

「やめろ！」
「のわっ！？」

びくっと思わず跳ねてしまった。
カリスはしばらくの間をおき――――瞬時に振り返った。
ドアを開けたまま立っていたのは……すくなくとも外見は高校生に見える男。それもどこか見覚えのある風貌だ。

（ああ！　わたしを轢きやがったあの野郎だ！）

朝のひき逃げ少年A、彼はカリスを睨むのをやめ、ようやく口を開く。
「その宝石はオレの母が残した大切な形見だ。絶対に盗らせはしない」
カリスの、ショーケースを破ろうとした手がピタリと止まった。
――わずかな迷いと罪悪感。
そうこうしている内に、
「警部、怪盗カリス発見！　怪盗カリス発見！」
(げ、最悪！)
異変に気がついたのかぞくぞくと人数が集まってきた。警部も肩を怒らし、目を血走らせてもどってくる。
「テメェ、よくもこんな木片でだましやがったな！」
「いえいえ、それほどでも」
「この、ふざけやがって！」
そう言って手に持った木片を思いっきり投げつけた。
「やれやれ、今日は使わないで終わると思ってたんだけどなぁ」
うでを組んで困ったように左右に首を振るカリス。
「この、まだ悪あがきを」
「いえ、今回はわたしの負けです。警部」

直後――腕組みした袖からなにかがポロッとこぼれ、地面に接触、カッと激しい閃光が炸裂した。

「けど、憶えておいてください。わたしも盗賊の端くれとして、必ずリベンジを果たしますから」

かけていたサングラスを取り外し、カリスは今度こそ窓枠から外界に飛び出した。

†

カリスが予告した場所とはいくぶん離れた都内。

汐留シオサイトのとある高層ビル屋上。

高層ビルの真下には何十台ともいわんパトカーがものすごい勢いで停車する。中から飛び出すように複数の警察官が現われた。

彼らの標的はただひとり。〝黒衣の盗賊〟と世間で騒がれるひとりの泥棒。

そして、当の本人は高層ビルの屋上から彼らを眺めていた。

「やれやれ、面倒だな」

漆黒のコートから銃身の真っ黒な拳銃を取り出す。剣の意匠が施された拳銃。

「さあ、ショータイムの始まりだ」

それは不敵な笑みを浮かべる。

この台詞を放った時刻がカリスの犯行時刻と重なっていたのは偶然か必然か。
ただ全てを知っているのは天井の月のみ。
運命が交わるのも。多分、すぐそこに迫っている。

フレイム・アイ　後編

金色の三日月が照らす深夜。

屋根から屋根へと飛び移るとカリスは自室の窓をこっそりと開けた。

(右よし、左よし。お父さんはいないね。よっと)

自分の部屋に入ったカリスは胸元から一枚のカードを取り出す。ハートのA、切り札を構成する一枚、絵柄にはハートの紋章とAの文字が刻まれている。

「——聖杯封印」

純白の衣が純白の羽根に変化し、いっせいに虚空へ舞い散った。羽根が風に乗って周囲を渦巻き怪盗カリスという名の仮面を剥がしていく。

飛び散った白き羽根は風に乗せてカードの中に封印。これで元の自分に逆変身したはずだ。

「でも、どういう仕組みだ。これ?」

世にも不思議な現象だが、ま、なるもんはしょうがない、そう割り切って自室のベッドにゴロンと寝転がる。

「ふう、疲れた」

一息つくとすぐに今日の出来事が思い浮かんだ。

〜その宝石はオレの母が残した大切な形見だ。絶対に盗らせはしない〜

思い出されるのは怒りの中にわずかな懇願を織り交ぜた表情。

盗む？　ｏｒ　盗まない？

盗んじまえ、と囁く悪魔な自分（カリス）と、盗んじゃダメだ、と囁く天使な自分。天使と悪魔の自分が混沌と入り乱れる。

（だあ、ちくしょう！）

癖毛気味の頭をガリガリとかき、湊はひたすら悶々とした。

フレイム・アイ　後編

昼。

屋上で食堂特製の弁当で昼食を食べながら湊は考えていた。

一時間目から四時間目までを犠牲にして考えていたのだが一向に考えはまとまらない。

盗む？　ｏｒ　盗まない？

天使の自分と悪魔な自分がデスマッチ。現在、両者の意思は互角だ。

とりあえず大好物のエビフライを箸でつまんで、

「う〜ん、ちょっと塩気が強いな」

なぜかつまんだエビフライは香里の口に入っていた。

「のわぁ！？」

ミス・神出鬼没とまで称された自分を驚かすとは。そんな人物、ひとりしかいない。

「よ！　たそがれてんな。青少年」
「お、オレになんの用だよ？」
「いや、心配になってさ。湊、朝から元気がないし」
「余計なお世話だっつーの」

香里から目を背けて不貞腐れる自分。天邪鬼は今日も絶好調だ。

「そう腐るなって。悩みがあるなら話してみろ」
「ハン、悩みなんかねえよ。あったとしても話せるか」

（泥棒の気持ちなんて泥棒にしかわからないしな。ハハハ）

「わからないって。ためしに言ってみなさい。あたしがビシッと悩み相談にのってやる」
「悩み相談ねぇ」
「うんうん。だから話してみ」
「――おまえさ。他人を傷つけたこと、あるか？」
「ん？」
「あ、いや、悪い、忘れてくれ」

人を傷つけることは誰にだって経験がある。求める答えが得られるとは限らない。

「あるなぁ。他人を傷つけたこと」

香里の声のトーンが下がる。雰囲気が変わった。どこか冷たくなった。

（あれ、ひょっとして地雷か？）

「あの、香里さん？」
「けど、わたしはその”行為”を後悔しなかった。わたしの倫理や正義に反しているとしても、やめたくなかったから」
「ど、どういう意味だよ」
「あ、いや。察するにあんたの悩みは他人に傷つける行為をしてしまったか、しようとしてるってことだろ。それについての私的な意見だ」

そうなのだ。この女はずぼらに見えてとてつもなく勘が鋭いのだ。

「じゃあ、結論として。オレはどうすればいいと思う」
「う～ん、わたしは答えを出せないかな。それに悩みなんて自分で答えを探したほうがいいさ。これは実体験だから間違いない」
「悩み相談とやらはどうした、オイ」
「丸投げした」
「すんなよ！？」

（けど、なんかやる気出た）

湊はゆっくりと立ち上がった。

†

夜。
怪盗カリスからの予告状がふたたび狩谷邸に届いた。
橘は昨日と同じような配置で警備体制を組み立てる。
（あいつに小細工は無意味だ）
無線機に向かって橘はほえる。
『狩谷邸、および周辺をパトロール中の……』
「あ、来ましたよ。警部」
「あん？」
無線機をもどして、橘は部下が指差す方向を見つめた。
「どうも」
まだ高校生の少年だ。もろもろの事情で彼が狩谷家の代表者となっている。
「刑事さん、宝石は大丈夫なんでしょうか？」
「月並みの文句ですが。宝石は我々警察が護ります。ご安心ください」
橘は自分でも似合わないと思う笑みを口元に浮かべる。
「よろしくお願いします」
「ま、相手は尻尾を巻いて逃げ出した単なるコソ泥。大船に乗った気持ちでいいですよ。ナハハ――熱ぃっ！！」
「ご、ごめんなさい！　つい手が滑っちゃって」

橘の足元には紅茶のような液体がこぼれていた。見上げるとお盆を持ったお手伝いさんの姿。

「本当にごめんなさい！　熱かったでしょう。大丈夫ですか？」

真剣に申し訳なさそうな表情で、お手伝いさんはズボンをふいてくれた。

（気のせいか？　今、わざとカップを）

しかし、深々と頭を下げる彼女を見るとそんな疑問はどこかに拡散した。

「本当にすみませんでした」

「いえいえ気にしないでください。べつにたいしたことありませんから」

「そうですか。よかった」

彼女は天使の微笑で橘に微笑む。

（さっきのは気のせいだよな、うん）

彼女の無垢な笑顔に橘はコロッと騙された。

†

（なにが大船に乗ったつもりでだよ。あんたのは沈没船だっつーの）

心の中で悪魔の微笑を湛えているのはお手伝いさん――に変装した怪盗カリスだった。
本物のお手伝いさんは屋敷のトイレですやすやとおねんねしている。
準備は万端。
カリスは頬をはたいて自分自身に気合いを入れた。

（おし、やるぞ！）

スロープ上の階段を上ってメインの二階にたどり着く。階段を上りきると歴代の肖像画がカリスを出迎えた。
書斎はこの奥。
広大な廊下をしなやかな動作で駆けるカリス。
豪奢な扉。
扉のすき間から中の様子を慎重にうかがってみる。
（警備の配置や人数は昨日の焼き増し。扉に警備システムの類はなしと）

「そこでなにしてる」
「わぁ！？」

不意打ち気味で肩に手が置かれた。びくびくっと体が勝手に反応する。
振り返ると、ぶすっとした仏頂面の男、カリスひき逃げ犯が立っていた。

「そこでなにしてる」

執拗に同じ質問をくりかえす男。

「すみません。つい興味本位で」
「ふん、君は相変わらず落ち着きがないな。だから、さっきみたいな失敗をするんだ」
「すみません」

ここは低頭で平謝り。内心で考えをめぐらせる。

(ここは眠らせるのが妥当かな)

そうと決まれば、

「あ、あの」
「そうだ。悪いがオレの部屋まで風邪薬を届けてくれないか」
「べつにいいですよ。すこしお待ちくださいね」
「頼んだ」

(やった、ラッキー！　風邪薬と称して睡眠薬を手渡せば)

しばらく間をおいてカリスは彼の部屋をノックする。

「どうぞ」
「失礼します。風邪薬、持ってきました」
「ありがとう」

手渡した薬をあまりありがたくなさそうに受け取る。これを飲めばたちまち眠るはずだ。

「——これでわかった」

少年は手に持った薬を地べたに落とす。

「おまえ怪盗カリスだろ。さしずめこの薬は睡眠薬か？」

「うぇ？」

「おまえ怪盗カリスだろ。そう言ったんだ」

真剣な眼差し。冗談で言っているのではなさそうだ。

「わたしがカリスだと言うんですか？」

「そうだ。実はおまえが変装したその人にな。さっきと同じ文句ですでに風邪薬を持ってこさせてたんだよ。――ミスったな」

「なるほど。納得」

（さすがに会話の内容までは調べられないからねぇ）

それにしてもずいぶんと油断のならない相手だ。ここは搦め手を狙って。

「やだなぁ。わたしが怪盗カリスなわけないじゃないですか。冗談はやめてください」

「なら、さっきのやり取りをどう説明すんだ」

「それは」

自然な動作で男との間合いを詰める。

「なんのマネ、むぐ！？」

「ごめんね」

流れるような動作で軽い口づけ。口に含んでいた丸薬を相手に飲

ませる。

「て、テメェ」

「病人は素直に寝る。顔色悪いよ」

「余計なお世話……だ。くそ……」

そこで男の体は糸が切れたように崩れ落ちる。意識を失った男をすんでのところで支えた。

〜その宝石はオレの母が残した大切な形見だ。絶対に盗らせはしない〜

彼を眠らせて、自分は罪悪感から逃れたいのだろうか。

自嘲気味に笑うカリス。そして、そっと自身の唇に触れてみる。

（それに、カリスの精神（こころ）じゃなんとも思わないけど。男のわたしはあのキスを死ぬほど後悔するだろうなぁ。自分にも悪いことしたよ）

それを思えば自分自身にも罪悪感が湧いてしまうカリスだった。

†

お手伝いさんの格好で書斎の中に堂々と入った。昨日と同じ手だが、いちおう考えはある。

「こんな場所にどのようなご用件ですか？」

警部は警戒心むき出しでこちらを見つめた。カリスの可能性を疑

っているんだろう。当たり前か。
愛想笑いを浮かべて横目で獲物を凝視する。
ショーケースに封じ込められた女神像。その左眼にある炎を思わせるガーネット。
この屋敷には様々な仕掛けを施している。逃げ道も確保。後はあれを盗むだけ。
「あの宝石に用があるんですよ、警部」
お手伝いさんのエプロンと変装用のマスクが中空を舞い、カリス本来の純白の衣装に身を包む。
「――怪盗カリス、参上！」
カリスの周囲を純白の羽根が舞い散る。警部は邪魔臭そうに羽根を払うと、
「いい度胸だ。真正面から来るとは思わなかったぜ」
「そりゃどうも。こぼした紅茶は熱かったですか。警部？」
「テメェ、あれはやっぱりわざとか」
「ご明察♪」
右手と左手に扇状に五枚づつ。計、十枚のトランプを広げる。
「ケッ！　マジックでも見せてくれるってか」
「お望みなら」
十枚のトランプをスナップを利かしていっせいに投擲した。カードは部屋の隅々、四方の角に突き刺さる。

「どこ狙って。うわ！」
ショックを感知して、仕掛けた装置から煙幕が噴き出した。
「こら、いつ仕掛けやがった！」
「秘密♪」
「くそ！　どこだ」
ガスマスクをかぶって、いつものように手際よくバールでショーウインドウを割る。女神の左眼、フレイム・アイは無事に手元におさまった。
願わくば、この宝石が目当ての宝石じゃありませんように。
そう願ってカリスは窓枠のもとまで疾走した。
「そこか！」
足音を聞きつけて大柄で屈強な男たちが飛んでくる。その足元へトランプを投げた。
「まあ、そう動きなさんな。動いても怪我するだけだよ」
切れ味鋭い特製カードが彼らの足元に突き立てられた。
相手がひるんだ隙に内部からガラスドアのロックを解除する。
「今度こそ、グッバイ♪」
窓枠を蹴り、身軽な動作でカリスは屋根の上に逃げた。
（ふう、後は逃走するだけ。急がないと）

「――ま、待ちやがれ」

屋根の下から誰かの声が聞こえた。

次いでゾンビみたいに腕を伸ばして誰かが這い上がってくる。声で正体はわかったけど。

「アンタ、どうしてここに？」

「テメェの後ろ姿が見えたもんでな」

青白い顔でカリスひき逃げ犯が屋根上によじ登ってきた。

「あんた、なんでピンピンしてんの」

「お、オレはあの薬を飲んじゃいない。口に含んで後で吐き出した」

「けど、たしかに気絶してたはずじゃ」

「あ、あれは風邪でぶっ倒れただけだ。無理して動き回ったからな」

「それって現在進行形で無理してるんじゃ」

「おまえが心配することじゃない」

顔面は蒼白、呼吸も断続的で荒い。気分が優れないだろうということはすぐに察せた。

「その宝石は返してもらうぞ。大事な母の形見だ」

カリスはだまって後ろ手に宝石を隠した。無言の意思表示。

「なら、力ずくで返してもらう」

本当にきつそうだ。よほど重度の風邪をひいていたのか。見るほ

うも痛々しい。
「どうしても、やる？」
「愚問だな。その宝石は絶対に渡さ、うぐ！？」
頭痛に襲われたのか、彼の体がぐらっとかたむいた。その肉体は人形のように力なく踊り、屋根から落ちようと、
「世話焼かせんな、こら。ぐうううう、お、重い」
ギリギリで片腕をつかめたけど、女の力じゃ男子高校生の全体重を支えきれない。
「うう、どりゃあ！！」
それでも、かつおの一本釣りみたいに根性で引っ張り上げた。ありえない放物線を描いて彼の肉体はもとの場所におさまる。
この人間離れした馬鹿力、呪いのおかげだ。今回ばかりはこの呪いの魔法に助けられたらしい。
「それにしても、まったくあんたの熱意にゃ負けた。返すよ、これ」
ハンカチに包み込んだ宝石を肩で息をする彼にポイと投げる。
「情けをかけるってか。コソ泥の情けなぞ、オレはいらない」
「ちがうね、情けじゃない。これは男らしい根性をみせたあんたへのご褒美」
「……くっだらねえ」
それを最後に彼はまぶたを閉じた。安らかな呼吸。無理が祟って

疲れが体の許容範囲を超えたのだろう。

「その男っぷりには恐れ入ったよ。わたしが〝本物〟の女なら惚れてた、なんてな」

そう言って怪盗カリスは今日も変わらず輝く月を見上げた。

(そう、この姿は偽り、偽者の存在。魔法が解ければわたしという存在は消えて、黒井湊として人生を終えるのかな?)

自分がやろうとしていることは本当に正しいのだろうか。

その答えを見つけるためにも自分は宝石を盗むのだ。これからも。

真下を見下ろせば警部がこっちに向かってほえている。

「ここらが潮時か」

カリスはどこから現れたのか闇色の気球につかまり悠々と屋敷から脱出した。

†

都内の上空を飛行し、とあるビルの屋上へと降下を開始するカリス。

気球から軽いステップでコンクリートの地面に着地した。

「ふう。ん?」

妙な気配を感じる。漆黒に塗り潰された空間にカリスは目を凝らした。
闇から溶け出すように現われるひとりのシルエット。給水タンクの上だ。
「怪盗カリス？　こんな場所で会うとは。奇遇だな」
「えっと、どちら様でしょうか？」
「オレはおまえの同業者、かな」
軽快な身のこなしでそれは降り立った。夜の静けさを侵さぬように、無音で。
漆黒の衣を纏い、黒髪の上を青いバンダナが巻かれ、白のスカーフで顔を隠している。
浮世離れした出で立ちの黒衣の男だった。

「……コスプレ？」

見たまんまの率直な感想を述べるカリス。
「おまえに言われたくはないな」
そう言ってなにか物を投げてきた。反射的にそのなにかを受け取る。
それは見事な宝石だった。月光に照らされ幻想的な輝きを放っている。
「それは目的の品じゃなかった。盗品だがくれてやるよ」
「って、盗んだのか、おまえ！」
「言っただろ。オレはおまえと同業者だって」

そう言って漆黒の衣をひるがえす男。

「厄介なお客様が来たみたいだ。オレはお暇するよ」

そう言って男は夜の闇に帰っていく。それと入れ違いで複数の警察官が屋上にやってきた。

「か、怪盗カリス!?」「警部、カリスです。怪盗カリスが現れました!」「盗まれた宝石も持っています」

(盗まれた宝石。って、これかよ!?)

慌てて宝石から手を離した。コンクリートの上で転がる宝石。

その後もぞくぞくと警察官が、上空を旋回するヘリコプターが、真下にはパトカーが、四方八方からカリスの包囲網を狭めていく。

「……冗談きついぞ、コレ」

カリスはめずらしく不敵な笑みではなく、ひきつった笑みを浮かべた。

END

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7454b/

聖杯の女怪盗

2010年12月16日21時53分発行